

たより

円山璃保

僕は寝起きの重たい腕で豆腐のような固形石鹼を掴もうとしていた。しかし石鹼は何度も僕の手から滑り落ち、ついに掴めなかった。気を取り直して自室のクローゼットへ移動し几帳面にあしらわれた漁網のようなサマーカーデイガンに袖を通す。頭上の壁掛け時計をみると、キャンパスの隅、公道に隣接する棟で行われる一時限目の講義に間に合う出発時刻が迫っている。僕は家を出た。通勤快速列車の定員を超えて呼吸する触れ合う肩の熱伝導にこの星が纏う目的やよそよそしい安堵だけは奪われない仕事なんだぜ、と教わりながら保険会社の車内広告を見つめた。

「チャイムが鳴りましたので授業始めます。」

プリントの束からそれを一枚ずつ引き抜いて、隣の人に回していく。ぴーろーりーろー。早い者勝ちではないので取り合わなくてよい。

「全員、回りましたね。今日は皆さん発表救急車が通りますですね。ぴーろーください。」

「え？」

突然、周波数が乱れる。でも、安堵は奪われないんだぜ……。

「外で、通ります救急車が通りますが。」

どうやら窓の外を走る救急車から放たれた言葉のにおいとかが、教室の換気扇を引っ掻いたため空調が乱れたのだった。

「外をぴーろー」

「外にりーろー」

「外だぴーろー」

授業の進行は一時中断され、ぴーろー窓の外へ話が展開されたもののサイレンに上昇した心拍数でうまく聞こえない。りーろー聞き取れない、のは、いつもだ。これって、四捨五入すれば、言葉をいまだに読み取れない僕にとっちゃ、常だぜ。